地学と切手

中東の地震被災救援切手

P. Q.

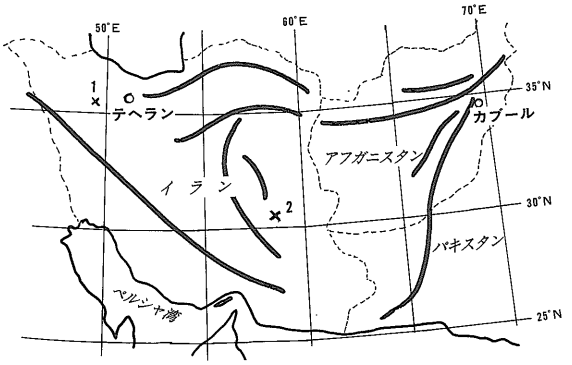
中東のイラン，パキスタン，アフガニスタンは日本と同様世界でも有数な地震多発地帯である．それは内陸部にあってマグニチュード7の前半が多く，まれに8.0に達し，この地域の泥と粘土の家屋と言う生活様式と共に被害を大きくして来た．一朝地震が起ると家屋の被害が大きく，住民の大半が死傷すると言う，日本での直下型地震に相当する．そう言えば直下型地震とは人口密集で，地震学の発達した日本で言い出された言葉で，未だこれに相当する英語がないそうである．果して「つなみ」と同じ様な日本起源の学術語になるのであろうが興味が持たれる．

イラン，アフガニスタン，パキスタンのいわゆる中東は，インド，ユーラシア，アラビアのプレートが複雑にくみ合った地域である．パキスタンとアフガニスタンの国境がインドプレートの西端で北へ深く喰い込んだ所に当り，オーウェン構造帯の延長であるチャーマン活構造帯に当る．これを初めとして多くの活構造帯が認められる．

イランの最近の地震を挙げると以下の通りである．地震の大きさに対して死者が多い特徴がある．

		マグニチュード	死者
1948年	北部国境	7.3	(不明)
1962年	カズビン	7.25	10,000人以上
1968年	ダシュート・エ・バヤーズ	7–7.25	11,000人以上
1968年	フェルドウス	7.0	2,000人以上
1972年	イラン東南部	7.1	5,000人以上
1978年	タバス	7.3–7.7	15,000人

アフガニスタンにおいても地震は1505年のパグマン地震が良く記録されている．この時は北—北東約60 kmの地震断層が生じ数mの垂直変位が知られている．恐らく水平変位も伴ったものと推定されている．その後も多くの地震が起きたが，主に東部のチャプマン断層，北部のヘラート断層，タルマヂャール断層に沿ったものが多い．



中東の活断層帯　1：カズビン　2：タバス

イランの14＋6R切手は1963年2月発行の，カズビン地震被災者救援付加切手で，アフガニスタンの7aは1972年10月発行のAfghan Red Crescent Society記念切手である．

1962年のカルビン地震は文献によってはイパク地震とも呼ばれる．1962年9月1日10時55分，テヘランの西約200 kmの深度20 kmマグニチュード7.25で，12,225人，人口の35％を殺し，2,776名を傷つけた．この地震の特徴は地震断層(イパク断層)に伴われたことである．断層はほぼ東西を示すが地震に際して南上り，わずかに左横ずれの現象を示した．そしてこの断層は古い断層の再活動である点に今一つの特徴がある．石炭紀層は南側にあるが北側には分布しない．三畳紀層も同じである．断層は北ほど上昇して多くの削剝を受け，第四紀においても活動した．1962年の地震はこの古い断層に起因している．

1978年9月にはテヘラン南東約600 kmの砂漠の中のタバスで，マグニチュード7.3とも7.7の大地震が発生した．死者の数は約15,000人，砂漠の中にあったオアシスの傍の豊かな町が，一瞬の中に瓦礫の山となり，午後7時半のこともあって，人の大部分はその下に埋まってしまった．震源の深さは10～15 kmと浅く，被害範囲も50×20 kmと狭いが，激震範囲では100％の家屋倒壊率を示すと言う．

主に環境地質部衣笠善博課長の教示による．